

町に生まれる。平貞盛と将門を討ち、功により下野・武蔵の両国守となった平安時代の武将藤原秀郷の末裔であり、北条時頼が立ち寄ったとき、大切にしていた鉢の木を囲炉裏にくべてもてなしたという「鉢の木」の話で知られる、佐野源左衛門常世の末裔である。のち海軍兵学校に入学し、明治35年に家督を継ぎ伯爵となる。



東郷平八郎艦長のもとで

砲術長、海軍高等通訳官、ドイツ大使館付武官、戦艦榛名艦長などを歴任。大使館付武官時代、しばしばロンドンに滞在しボーイスカウト運動を見聞する機会が多かった。退役後、大正11年、栃木県佐野に唐沢義勇少年団（後の唐沢ボーイスカウト）を結成以来スカウト運動に尽力するようになった。

55歳の頃、京都の少年団運動の創始者で、五条大橋の近くに薬種商を営んでいた中野忠八氏（後の日本連盟総長久留島秀三郎の実兄）を訪ねて教えを請うたところ、中野忠八は関西弁で「あきまへん、そんな自分が暇になったからというて、えらいさんの遊び仕事にできるもんやないわ。やめときなはれ。」と言下にこれを断わった。あきらめなかった佐野常羽は、店舗や表玄関ではなく勝手口から再三訪れ、辞を低くして面会を求めた。その身分も地位も省みない熱心さに中野忠八も感に打たれ、後にこの二人は意気投合して、日本のスカウティングの指導者養成に協力して、その基礎を築いたのである。

大正13年の第2回世界ジャンボリーに参加し、その後ボーイスカウト国際会議、世界ジャンボリーに日本代表として参加した。昭和6年には、ベーデンパウエルより、ボーイスカウトの最高栄誉章「シルバーウルフ」を贈られた。この「シルバーウルフ章」を贈られたのは、日本では昭和天皇と佐野常羽だけである。

日本のボーイスカウト運動においては、大正14年、指導者訓練所（のちの中央指導者実修所）を開設した功労がある。これによって、日本におけるボーイスカウトの指導者道が確立された。昭和29年、日本連盟は「長老」の称号を贈り、翌年には、日本連盟の最高功労章である「きじ章」を贈った。

昭和31年1月25日、86歳で逝去した。現在、ボーイスカウト日本連盟山中野営場の玄関に、佐野常羽の胸像がたててある。また、山中野営場には「佐野広場」があり、佐野記念碑（道心堅固の碑）が建てられている。

第2回世界ジャンボリーに参加した後、日本人として初めてイギリスのギルウェル訓練所に入所し、ここで「弥栄」を披露した。ギルウェル訓練所所長のJ. S ウィルソンが、入所している13カ国の指導者全員に、各国の「スカウト祝声」をやるよう